

欧陽脩『醉翁琴趣外篇』の成立過程について

東 英 寿

一、はじめに

今日に見られる欧陽脩（二〇〇七～一〇七二）の詞集には以下の三系統がある。

- （南宋）『近体樂府』（一九四首収録）
- （南宋）『醉翁琴趣外篇』（二〇三首収録）
- （明・毛晋）『六一詞』（二七一首収録）

このうち明・毛晋の『六一詞』は、彼による作品の取捨選択が行われており、更にその構成から見ると『近体樂府』を踏襲していることがわかる。従って、欧陽脩の詞集としては、『近体樂府』と『醉翁琴趣外篇』の大きく二つの系統に分けることができる。『近体樂府』と『醉翁琴趣外篇』に共通して収録されている詞は一二四首で、『近体樂府』のみに収録されている詞は七〇首、『醉翁琴趣外篇』のみに収録されている詞は七九首である。

唐圭璋はこれらの詞を取捨選択するなどして、『全宋詞』に欧陽脩詞として二四〇首を収録している。

『近体樂府』は、『歐陽文忠公集』卷一三から卷一三三に収録されることで今日に伝わった。『歐陽文忠公集』とは、南宋の紹熙二年（一一九二）から慶元二年（一一九六）まで六年の歳月をかけて周必大（一一二六～一二〇四）らが中心となつて編纂した欧陽脩の別集である。従つて、『近体樂府』は周必大らの別集編纂事業の一環として校訂、編纂を経て、慶元二年に完成していたことになる。『近体樂府』の編集を担当したのは、校勘の署名により羅泌という人物である。羅泌については具体的な事蹟はわからないが、『宋史翼』卷二九に「羅泌、字長源、廬陵人。學博才宏、侈遊墳典、迺搜集百家成路史四十七卷」と記載されている。『百家成路史』が如何なる書籍であつたかは不明であるが、この記述から羅泌は欧陽脩と同郷人で、古典に通じた学識の豊かな人であつたと言える。

一方、『醉翁琴趣外篇』は『近体樂府』に見えない欧陽脩詞七九首を含む合計二〇三首の詞を収録している。次章で指摘するように、欧陽脩の詞の中には宋代当時から偽作説が提出されているものもあり、しかも偽作と言われる詞が『醉翁琴趣外篇』に多く含まれると見なされ、これまで『醉翁琴趣外篇』自体に対しても疑問が提出されている。

そこで、本稿では欧陽脩詞に対して提出された従来の偽作説と『醉翁琴趣外篇』との関連を整理した上で、これまで不明であつた『醉翁琴趣外篇』の成立過程を能う限り明らかにし、以て『醉翁琴趣外篇』の特色を考察したいと思う。

二、偽作説について

柏寒『六一詞』^①、宋柏年『歐陽修研究』^②においては欧陽脩詞について次のように述べる。

欧詞中有很多愛情篇章、特別是在《醉翁琴趣外篇》中、有不少關於男女情事的描写。歷來詞的評論家一方面把這些詞貶斥為鄙褻之語、別一方面又為賢者諱、認為「一代儒宗、風流自命」的欧陽修不可能写出這樣的詞。曾慥說、「當時小人或作艷曲、謬為公詞」（《樂府雅詞序》）王灼認為這些詞是他人所作、「群小指為永叔、起曖昧之謗」（《碧鷄漫志》卷三）。吳師道認為「當是仇人無名子所為」（《吳禮部詞話》）羅泌更指為劉焯偽作、在整理《平山集》時、干脆尽行刪去。

（欧陽脩詞の中には多くの愛情の作があり、特に《醉翁琴趣外篇》中に多くの男女の事柄に関する描写がある。歴代の詞の評論家は、これらの詞を鄙猥の語として斥け、また賢者が忌み嫌うものであって、「一代儒宗、風流自命」の欧陽脩がこのような詞を書くことができないとも考えた。曾慥は言う、「当時の小人があるいは艷曲を作つて、誤つて欧陽公の詞とした」（《樂府雅詞序》）と。王灼はこれらの詞を他人の作と認め、「とるに足らぬ者たちは、欧陽永叔が作つたと指摘し、男女の関係が怪しいとして譏つた」（《碧鷄漫志》卷三）。吳師道は「当然、仇人や無名の者が作つたものに違いない」（《吳禮部詞話》）と認めた。羅泌は更に劉焯の偽作だと指摘し、《平山集》を整理する時、思い切つて全部削除した。）

欧陽脩の詞には、愛情を詠つた詞が多数あり、特に『醉翁琴趣外篇』には、多くの男女の事柄に関連する詞がある。歴來の評論家は、それら『醉翁琴趣外篇』中の詞を鄙褻の語として斥け、あるいは「一代儒宗、風流自命」の欧陽脩は、そういう詞を作成しないと見なしているとし、その後曾慥、王灼、吳師道、羅泌らの記述を例に出して論証する。ところが、ここで挙げられる北宋の曾慥「樂府雅詞序」の實際の記述は以下の通りである。

欧公一代儒宗、風流自命、詞章幼眇、世所矜式、當時小人或作艷曲、謬為公詞。

(欧陽公は当代の儒宗で、風流を自任し、作品は奥深く優れており、世間で敬われている。当時のとるに足らない者があるいは艶曲を作つて、誤つて欧陽公の詞とした。)

確かに曾慥は、欧陽脩が「一代儒宗」なので、艶冶な内容の歌曲を作るはずがないと見なし、欧陽脩詞の中には小人が作つた詞が混入していると指摘している。ただし、この記述中において、曾慥は『醉翁琴趣外篇』について一切触れておらず、その名前すら記載されていないことは注意すべきである。同様に、柏寒氏らが引用している王灼『碧鷄漫志』、羅泌の校勘の記述においても、『醉翁琴趣外篇』については一切言及がないのである。

(こゝで柏寒氏らが呉師道『呉礼部詞話』として引用する「当是仇人無名子所為」という記述は、実は陳振孫『直齋書録解題』の記述の誤りである。なお、呉師道『呉礼部詞話』の記述については後述する)

次に李栖「醉翁琴趣外篇真偽考」の記述を見てみたい。^③

就目前可見到的資料中、認為琴趣是偽作的、最早見於北宋曾慥樂府雅詞序、「欧公一代儒宗、風流自賞、詞章幼眇、此所矜式、當時小人或作艶語、謬為公詞」。其次是校訂欧陽脩全集的羅泌、他在近体樂府卷三的第三一篇跋中說、「云云、今定為三卷、云云、其甚淺近者、前輩多謂劉焯偽作、故削之」。王灼說、「欧陽永叔所集歌詞、自作者三之一耳。其他他人數章、群小因指為永叔起曖昧之謗」。陳振孫也說、「其間多有与陽春、花間相雜者、亦有鄙褻之語一二廁其中、当是仇人無名子所為」。

(いま見ることができ資料中で、醉翁琴趣外篇が偽作であると認めているのは、最も早くは北宋曾慥の樂府雅詞序で「欧陽公は当代の儒宗で、風流を自任し、作品は奥深く優れており、世間で敬われている。当時のとるに足らない者があるいは艶曲を作つて、誤つて欧陽公の詞とした」と。その次は、欧陽脩の全集を校訂した羅泌で、近体樂府卷三の第一一篇の跋に「云々、いま定めて三卷とする、云々、甚だしく浅近な内容の作は、先輩は多く劉焯の偽作だと言うので、それを削除した」と。王

灼は「欧陽永叔の集めた歌詞のうち、自作は三分の一だけだ。その他の他人の数多の作は、とるに足らない者たちが、欧陽永叔が作ったと指摘し、男女の関係が怪しいとして譏った」と言う。陳振孫も言う「その間の多くは陽春集、花間集の作が混入し、また鄙猥の語も一二その中に混じっている。当然仇人や無名の者が作ったものに違いない」と。

ここで、李栖氏は、現在見ることができる資料の中で、『醉翁琴趣外篇』を偽作だとしている資料として、最も早くは北宋の曾慥「樂府雅詞序」、次に『近体樂府』を校訂した南宋の羅泌、更に王灼、陳振孫の記述を挙げ論証する。既に見てきたように、曾慥、羅泌、王灼は欧陽脩詞に偽作が含まれていると認めてはいるが、『醉翁琴趣外篇』が偽作であるとは述べていない。また、陳振孫については『直齋書錄解題』に次のように記述する。

欧陽文忠公修撰。其間多有与花間、陽春相混者、亦有鄙褻之語一二廁其中、当是仇人無名子所為也。

（欧陽文忠公修の撰。その間の多くは花間集、陽春集の作が混入し、また鄙猥の語も一二その中に混じっている。当然仇人や無名の者が作ったものに違いない。）

欧陽脩の詞には五代時代の『花間集』や馮延巳『陽春集』との混同が見られ、「仇人無名子」が作成した「鄙褻」の語を持つ詞が混入していると指摘してはいる。ただ、この陳振孫の記述も『醉翁琴趣外篇』が偽作であるということに言及したのではない。

これまでのことを整理すると、北宋の曾慥らの記述では、艶冶な内容を持つ欧陽脩詞に対して、確かに偽作の可能性を指摘している。ただ、それらの記述中では、『醉翁琴趣外篇』には一切言及がないのであり、『醉翁琴趣外篇』が偽作であるという指摘は全く存在していないことがわかる。しかし、近人柏寒氏、宋柏年氏や李栖氏は、それら宋人の記述を拠り所とし、『醉翁琴趣外篇』に疑義を提し、あるいは偽作とみなし、しかも曾慥らはその事を指摘していると論じている。従って、李栖氏らが言う『醉翁琴趣外篇』が偽作であるという記述は、確

かな根拠に基づいたものではない俗説だと言えよう。

一方、田中謙二氏は「歐陽修の詞について」の中で次のように記述する。^④

いささか廻り道をしたが、この辺で本稿の意図を明らかにしておこう。つまりわたたくしは、欧陽修の詞集の定本ともいふべき「近体楽府」や他の選本に採られなかった七三篇の作品も、そのほとんどが公の手になったと見て、別にふしぎはないと思うのである。その方が、あの政治家として、或は哲学史学文学そして金石学など多方面にわたる学者・作家として、一五三巻の文集以外にも尠大な著作を遺した巨人欧陽文忠公の、人間的振幅をさらに大ならしめて痛快きわまりない。むろん「近体楽府」に収められた詞のみについても、他人の作の疑いあるものが少くないのだから（馮延巳一、晏殊九、張先六、李煜・柳永・秦觀各二、唐無名氏・蘇軾・黃庭堅・杜安世各一）「琴趣外篇」にとり残された七三篇のすべてが、彼の手になったとは保証しがたい。ただ、俗艶のゆえをもつてそれらを公に帰属させない、後の道学先生の所為が不満なのである。

ここで田中氏が言う「近体楽府」や他の選本に採られなかった七三篇、「琴趣外篇」にとり残された七三篇」とは、『近体楽府』に収録されず『醉翁琴趣外篇』にのみ存在する詞のことを指している。（実際は七九篇）これらの作品について、その俗艶な内容からみて、宋代以降道学先生は欧陽脩の作ではないと見なしてきたが、田中氏はそれらを含めて（一部例外はあるもの）欧陽脩の作と見なすという立場であることがわかる。

そもそも詞の内容が浅近、鄙褻であることのみを根拠に、「欧陽脩の作品ではない」、甚だしくは「仇人による偽託」と宋代以来見なされ、更にこれらの詞が多数収録された『醉翁琴趣外篇』自体も偽作と見なすことと、田中謙二氏の俗艶な詞を真作と認める方が、「欧陽文忠公の、人間的振幅をさらに大ならしめて痛快きわまりない」という説とは、一見すると正反対のようであるが、実は全く同じ思想的基盤に立脚するものだと言える。何

れも詞の内容に作者の人格の表出を見ているのであって、異なるのはそれに対する評価の基準だけなのである。

宋代当時、詩と詞では明らかに「身分」が違っており、創作態度も評価の基準も異なっていたはずである。詞は、宴席の音楽として発展し民間でも大いに流行したもので、詞を作るのは当然「遊び」の要素が強い。よって内容に対する評価の基準は「遊びとしての面白さ」であり、内容の虚実、当否、著者の身分や立場との適合性等は度外視されるはずである。南宋・羅大経『鶴林玉露』丙編卷二では欧陽脩の詞作について「雖游戲作小詞、亦為愧唐人花間集」と記述し、まさしく欧陽脩が「游戲」として詞を作っていたことを指摘する。一方詩の制作はと言えば、実態として「遊び」という側面の存在を全否定することはできないが、建前上は『詩経』の原則に基づいており、すなわち士大夫という立場に直結した活動なのである。

このような考え方が妥当であるならば、これまで欧陽脩詞、特に『醉翁琴趣外篇』収録の詞を分析する際にとられてきた態度、すなわち「詞の内容に作者の人格の表出を見る」のは見当違いということになる。傍証として、作品の扱い方の悪さも、「身分」と言う概念で説明がつく。著者自身からも粗末に扱われ（欧陽脩自身が集成して本を作る事も無く）、後人からもいい加減な扱い（偽託、混同、改作）を受けたのも、詞の「身分」が低いからとして説明がつくと考える。

これまで詞の内容に基づいて欧陽脩詞に対する偽作説が提出されてきた。更には、それを踏まえて『醉翁琴趣外篇』の素性を疑う近人の論考も数多かった。しかし、詞の内容から欧陽脩詞かどうかを判断するのは、既に指摘したように全く正鵠を射ていないことになる。『醉翁琴趣外篇』が偽作かどうかについては、あくまで当時の資料に基づいて考証すべきである。従って、次章では宋代当時の資料に基づき、『醉翁琴趣外篇』について考えたい。

三、歐陽脩家側資料から見た『醉翁琴趣外篇』

先ず、歐陽脩家側の資料に基づき、彼が亡くなった直後に残されていた著作を確認しておきたい。歐陽脩の死の翌年（熙寧六年、一〇七三）に呉充によって作成された「行状」の中で、著述に関連する記述は以下の通りである。

嘗被詔撰唐書紀十卷、志五十卷、表十五卷。又自撰五代史七十四卷。……嘗著易童子問三卷、詩本義十四卷、居士集五十卷、帰榮集一卷、外制集三卷、内制集八卷、奏議集十八卷、四六集七卷、集古録跋尾十卷、雜著述十九卷。諸子集以為家書總目八卷。其遺逸不録者、尚數百篇、別為編集而未及成。

（以前、詔によって唐書紀十卷、志五十卷、表十五卷を撰した。更に自から五代史七十四卷を撰した。……これまでに易童子問三卷、詩本義十四卷、居士集五十卷、帰榮集一卷、外制集三卷、内制集八卷、奏議集十八卷、四六集七卷、集古録跋尾十卷、雜著述十九卷を著した。諸子は集めて家書總目八卷を作った。洩れて収録されていないものが、尚ほ數百篇あり、別に編集しているがまだ完成していない。）

ここでは『醉翁琴趣外篇』という記載はない。更に、この「行状」から三十三年後の崇寧五年（一一〇六）に作成された蘇轍「歐陽文忠公神道碑」には次のように記載する。

凡為易童子問三卷、詩本義十四卷、唐本紀表志七十五卷、五代史七十四卷、居士集五十卷、外集若干卷、帰榮集一卷、外制集三卷、内制集八卷、奏議集十八卷、四六集七卷、集古録跋尾十卷、雜著述十九卷。

（すべてで易童子問三卷、詩本義十四卷、唐本紀表志七十五卷、五代史七十四卷、居士集五十卷、外集若干卷、帰榮集一卷、外制集三卷、内制集八卷、奏議集十八卷、四六集七卷、集古録跋尾十卷、雜著述十九卷である。）

吳充の「行状」の作成から三十数年間に、歐陽脩の作品集として新たに『外集』若干巻が加えられていたことがわかる。ただ、やはり『醉翁琴趣外篇』の名前は見えない。しかも、宋代の書籍目録である『郡齋讀書志』、『直齋書録解題』にも『醉翁琴趣外篇』の名は記載されていない。従って、かかる宋代の資料から考えると、『醉翁琴趣外篇』の成立時期は些か不明である。

『醉翁琴趣外篇』という名前が初めて記載されるのは、次に挙げる元・呉師道（至治元年（一三二一）の進士）『呉礼部詞話』である。

近有醉翁琴趣外篇凡六卷二百余首、所謂鄙褻之語、往往而是不止一二也。

（近ごろ醉翁琴趣外篇全六巻二百余首があり、（その中には）所謂鄙褻の語がしばしば見られて一二にとどまらない。）

呉師道は「鄙褻之語」が多いことを指摘しているが、ここで『醉翁琴趣外篇』の名前を挙げており、従ってこの当時『醉翁琴趣外篇』が存在していたのは間違いないであろう。

では、『醉翁琴趣外篇』はいつ頃成立したのであるか。次章で考察するように『醉翁琴趣外篇』は既に南宋時代に存在しており、民国呉昌綬編纂『宋金元明本詞四十種』（一九一七年）に収録されたことで今日容易に見ることができるようになったと思われる。呉昌綬本を台湾国立中央図書館所蔵南宋本『醉翁琴趣外篇』（残存巻四、五、六）と比較してみたところ、その体例、形式が全く同一であり、呉昌綬本は南宋本に基づいていたことがわかる。ちなみに、『醉翁琴趣外篇』が前述した宋代の目録に記載されなかったのは、それが『郡齋讀書志』、『直齋書録解題』等の目録が刊行された後の南宋後期に編纂されたことを意味していると思われる。

四、琴趣外篇シリーズの存在

さて、『醉翁琴趣外篇』の成立を説明する鍵として、これまで注目されていなかったが、琴趣外篇シリーズとして把握するという視点を提出したい。『○○琴趣（外篇）』という名前をもつ書籍を『四庫全書総目』やその他の目録等から抜き出すと以下の九種類になる。

○今日にその本を伝えるもの

・ 欧陽脩『醉翁琴趣外篇』六卷

・ 晁補之『晁氏琴趣外篇』六卷

・ 晁端礼（元礼）『閑齋琴趣外篇』六卷

・ 黄庭堅『山谷琴趣外篇』三卷

・ 趙彦端『介庵琴趣外篇』六卷

○名前のみを伝えるもの

・ 葉夢得『琴趣外篇』

・ 秦觀『淮海琴趣』

・ 真徳秀『真西山琴趣』

・ 晏幾道『小山琴趣外篇』

琴趣外篇については、倉石武四郎氏が「琴趣外篇に就て」の中で次のように述べる。^⑤

従てこれらの所謂琴趣外篇は、その編刊の是非はとまれかくまれ、すべてある一地方に於て又ある箇人の手に於て統一的に企てられたもので、即ち琴趣外篇とはさういふ彙刻詞の通名であったと考えられる。山谷琴

趣の実物を見た朱氏の説によれば、南宋の閩刻本ださうである。而かも前述の理由を以てするならば、この鑑定は全部の琴趣に推衍することも、強ち不当ではないと信ぜられる。…(中略)…即ち醉翁・淮海・山谷の如き十目の指さす大家はともかくとして、趙介庵が齒されてゐることが先づ注意を惹く。即ち彼は少くとも現存の七種^⑥に於ける唯一の南宋人であつて、而かも前述の如く福建の建寧府に知たりしものである。これがかの南宋閩刻本といふ説と、果して何等の因果関係なきものであらうか。

ここで、琴趣外篇は福建地方で編纂された「彙刻の通名」で、所謂南宋閩刻本だと倉石氏が記述するのは注目すべきである。つまり琴趣外篇は、琴趣外篇という名前で統一的に企画された詞集であり、琴趣外篇シリーズとも言うべき刊行スタイルをとつた書籍だつたと思われる。

一方、徐培均氏は「淮海詞版本考」^⑦の中で、秦觀の『淮海琴趣』が真徳秀の『真西山琴趣』と合刻されていることに注目し、真徳秀が南宋の理宗端平二年(一二三五)に卒していることから考えて、『淮海琴趣』は理宗年間に作成されたと推定する。琴趣外篇がシリーズとして刊行されているとすれば、『醉翁琴趣外篇』も『淮海琴趣』と同様に理宗朝(一二二四～一二六四)に完成したのではないかと思われる。更に、今少し『醉翁琴趣外篇』の刊行時期を絞り込むことができる。陳振孫『直齋書録解題』には、上述した九種類の琴趣外篇のうち、唯一、葉夢得『琴趣外篇』について、「注琴趣外篇三卷 江陰曹鴻注葉石林詞」という記載がある。『直齋書録解題』ははっきりした完成年は些か不明であるが、南宋の淳祐一〇年(一二五〇)以降に完成したと言われている^⑧。とすれば、『直齋書録解題』作成の頃は、琴趣外篇シリーズのうち、曹鴻の注が附された葉夢得の『琴趣外篇』は既に出版されていたけれども、それ以外はまだ刊行されていない段階であつたものと思われる。従つて、歐陽脩『醉翁琴趣外篇』は、淳祐一〇年以降の理宗朝後期に刊行されたと考えられるのである。

徐培均氏は、「淮海詞版本考」の中で次のように述べる。^⑨

当時閩刻以建陽所屬麻沙、崇化兩鎮為最、凡書之為讀者所需而有利可圖者、坊賈輒広為搜訪雕印。

(當時、閩刻は建陽に屬する麻沙、崇化の兩鎮が最たるもので、おそらく読者の受容があり、利益を圖ることができる書籍は、商人がそのたびごとに広く探し求めて刊行した。)

琴趣外篇の刊行された理由が、当時の読者の需要があつたからだという指摘は注目すべきである。出版は南宋中葉頃には既に營利事業となつていた。読者の需要があり、利益をあげることができたので、琴趣外篇がシリーズとして刊行されたと思われるのである。

ところで、謝桃坊氏は「歐陽修詞集考」の中で、『醉翁琴趣外篇』の編纂について次のように指摘する。^⑩

這樣的推断雖近情理、但是宋人王灼《碧鷄漫志》卷二却有一則有關的重要記載：

歐陽永叔所集歌詞、自作者三之一耳。其間他人數章、群小因指為永叔、起曖昧之謗。

可見歐陽脩除了曾手輯《平山集》和《六一詞》而外、還編輯過一種歌詞集。据王灼粗略估計、其中歐公自作之詞占三分之一……王灼為北宋末人、去歐公時代不遠、他說歐公所輯歌詞集的性質及其中數章誣謗歐公的艷詞等情況、完全《醉翁琴趣外篇》冥若合符。《外篇》中欧公自作約占半數、同時取他人之作、數章艷詞也在其內。可肯定《外篇》確為歐公所編集者。

(このような推断は道理に近いけれども、しかし宋人王灼《碧鷄漫志》卷二には逆に次のような関連する重要な記載がある。

歐陽永叔の集めた歌詞のうち、自作は三分の一だけだ。その他の他人の數多の作は、とるに足らぬ者たちが、歐陽永叔が作つたと指摘し、男女の關係が怪しいとして譏つた。

とすると、歐陽脩はかつて《平山集》と《六一詞》を自ら編纂した以外に、更に歌詞集を編纂していたことになる。王灼の

だいたいの推計によれば、その中に欧陽公の自作の詞は三分の一を占めると。……王灼は北宋末の人で、欧陽公の在世時代に近く、彼は欧陽公の輯めた歌詞集の性質、及びその中の数作の欧陽公を誹謗する艶詞等の情況を述べており、それは完全に《醉翁琴趣外篇》に符合しているようだ。《外篇》中、欧陽公の自作はほぼ半数を占め、同時に他人の作も収録し、数章の艶詞もその中に含まれる。《外篇》は確実に欧陽公が編纂したものである。)

謝桃坊氏は王灼『碧鷄漫志』の「自作者三之一耳」という記述を根拠に、欧陽脩自身が『醉翁琴趣外篇』を編輯し、自作以外に艶約な内容を持つ他人の作を収録したとし、更に同論文中で、「既然《琴趣外篇》系欧公輯己作与流行歌曲之集、其中一百二十五首見于《近体樂府》者多数固為欧公之作、則其余的七十八首艶詞便与欧公無涉了」と記述し、『近体樂府』には見えず『醉翁琴趣外篇』にのみ収録される七八首（實際は七九首）は、欧陽脩とは全く関係のない他人の作であると結論づける。しかし、既に見てきたように『醉翁琴趣外篇』という作品名の記載は、欧陽脩家側の資料には全く残されていない。もし欧陽脩自身が作成したとすれば、必ず欧陽脩家側の資料に何らかの記述が残されるはずである。更に、『醉翁琴趣外篇』の編纂は琴趣外篇シリーズという観点から捉えるべきで、そうすれば他の琴趣外篇と同じく『醉翁琴趣外篇』は南宋理宗朝に作成されたことになり、北宋の欧陽脩が編纂に関与したという説は全く成り立たないことが明らかとなる。

また、李栖氏は「醉翁琴趣外篇真偽考」の中で次のように記述する。^①

沈曾植説、「羅泌跋云、云云。有平山集盛行於世。曾慥雅詞不尽収也。按今之六卷琴趣外篇、疑即平山集之類。欧集校語於平山琴趣略無微引、不知何故」……但他又奇怪羅泌的校語為什麼又完全不徵引醉翁琴趣。其實這一点是可以解枳的、因為羅泌早說了「其甚淺近者……劉焯偽作。」他已認定琴趣是偽作、当然沒有徵枳的必要了。

（沈曾植は言う、「羅泌の跋に云う。云云、平山集は世間で盛んに行われた。曾慥の雅詞には悉くは収録していない。考えるに、今の六巻の琴趣外篇は、おそらく平山集の類であろう。歐陽文忠公集の校語で、平山、琴趣はほとんど引用されていないが、その理由はわからない」……しかし、彼は更に羅泌の校語ではどうして全く醉翁琴趣を引いて実証していないのかと不思議がっている。その実、この点は解釈することができるのだ。羅泌は早くから「甚だしく浅近な内容は……劉焯の偽作である」と述べて、すでに琴趣が偽作であることを認めていたので、当然ながらそれを引用して論証する必要がなくなってしまうのである。）

羅泌が『近体楽府』を校訂した際に、なぜ『醉翁琴趣外篇』について一言も触れないのかという、清・沈曾植の疑問に対して、李栖氏は羅泌が『醉翁琴趣外篇』を偽作と認めていたので、使用しなかったと結論づける。しかし、本章の考察から既に明らかのように、『醉翁琴趣外篇』は南宋の淳祐一〇年（一二五〇）以降に完成したと推定される。それは、羅泌が『近体楽府』を完成させた慶元二年（一一九六）よりも、少なくとも五〇年以上後のことである。このような『近体楽府』と『醉翁琴趣外篇』の成立年代を確認すれば、清・沈曾植の疑問が一気に解決する。すなわち羅泌の『近体楽府』校訂時にはまだ『醉翁琴趣外篇』は編纂されていなかったもので、当然ながら羅泌は『醉翁琴趣外篇』を使用することができなかったのである。従って、沈曾植の疑問に対する李栖氏の解釈（羅泌は『醉翁琴趣外篇』を偽作と見なしていたので用いなかった）が間違いであることも明らかになるであろう。

五、閩本としての『醉翁琴趣外篇』

『醉翁琴趣外篇』には先行の『近体楽府』に見られない七九首もの欧陽脩詞が存在するが、それはどうしてな

のであろうか。

前述したように『近体楽府』は、周必大らの『歐陽文忠公集』一五三巻の編纂過程の一環として作成されており、慶元二年（一一九六）に完成していた。しかも、『歐陽文忠公集』一五三巻の各巻末の記載から校勘に使用されたと思われる諸本を抜き出してみると「石本、夷陵石本、綿州重刻大杭本、大杭本、綿本、綿州本、眉本、眉州本、衢本、浙江本、建本、閩本、承平時閩本、承平時印本、吉本、吉州本、吉州羅寺丞家京師旧本、京師旧本、羅氏本、羅本、恕本」であり、周必大らはこれら先行の二〇数種の諸本を校勘に使用していたことになる。更に、先行の歐陽脩全集の諸本以外に『歐陽文忠公集』編纂に当たり使用していた主な資料を校勘から抜き出してみると、「仁宗実録、両朝国史、李燾長編、文纂、慶曆文粹、熙寧時文、文海、京本英辞類藁、鍼啓新範、仕途必用」等であり、周必大らの編纂は、先行する資料を可能な限り網羅する大規模な作業であったことがわかる。この全集編纂の一環として『近体楽府』は作成されたので、おそらく羅泌も校勘に当たって数多くの資料を渉猟し検討したものと推測できる。ただ、羅泌の校勘に次のような記述があるのは看過できない。

其甚浅近者、前輩多謂劉輝偽作、故削之。

（甚だしく浅近な内容の作は、先輩は多く劉輝の偽作であると言うので、これを削除した。）

つまり、多くの資料を渉猟した羅泌ではあるが、歐陽脩詞の採録にあたって、内容が「甚浅近」である場合、劉輝の偽作だと判断し『近体楽府』に収録しなかったのである。既に指摘した通り、歐陽脩詞かどうかをその内容から判断することは大きな問題である。これまで、『近体楽府』は成立過程が明確で多くの資料に基づいているので信頼性が高く、一方『醉翁琴趣外篇』は成立過程が些か不明で、しかも俗艶な内容の詞が多いということで、信頼するに足りない資料として捉えられることもあった。しかし、『近体楽府』の採録にあたって、羅泌が

詞の内容を取捨選択の判断材料としているので、『近体楽府』を全て信頼することはできないと言える。羅泌の方針に基づけば、『近体楽府』作成時にその内容を根拠にして採録しなかった歐陽脩詞があつたのは間違いない。後に編纂された『醉翁琴趣外篇』にはそれら採録洩れの詞も収録されたと思われるが、後述するように『醉翁琴趣外篇』の編纂状況から考えると、七九首全てが『近体楽府』から採録漏れした詞であつたとは断定できないのも事実である。そこで、まず『醉翁琴趣外篇』が南宋の理宗朝、福建地方で編纂された閩本であるということに視点を置いて考えてみたい。

当時の閩本について、清水茂氏は『中国目錄学』において次のように述べる。¹⁸⁾

蜀は北宋の早い時期に栄え、テキストはすぐれているのに対し、閩は南宋になってから特に盛んで、営利出版の態度があらわに見え、テキストとしてはおとる。福建の中でも、出版業の中心は、建寧府建安県麻沙鎮であつて、麻沙本の名は、テキストとしてわるい本の代表とされた。

閩本の売らんかなの精神の露骨に見えている例をひとつあげよう。わが内閣文庫に蔵する、蘇轍の詩文集『類編増広穎浜先生大全文集』がそれである。この書物は「増広」とか「大全文集」という題名そのものが、すでに宣伝の用を持ち、いかにも読者に多量にして完全なという感じを考へて、購買欲をそそろうとするためのものである。ところで、この「大全文集」は、末尾に、第三百三十七巻とあつて、たいへん大量に見えるが、実は、途中、第十一巻から第二十巻まで、第二十六巻から第三十五巻まで、第四十六巻から第四十九巻まで、第六十七巻から第七十九巻まで、あわせて三十七巻は、はじめから存在しないので、実は一百巻にしかならない。もとの量の三分の一以上にあたる三十七巻も、巻数の水増しをしているわけである。

また、テキストがよいように見せるため、監本と銘うって、あたかも国子監の官刻本のようによそおうも

の、あるいは、京本と称して、首都で出版したかのように見せかけるもの、みな売り込みの手段であって、信頼できない。

閩本は、資料としての正しさを追求するのではなく、何とかして売り込もうという本屋の精神が露骨にあらわれた書籍なのである。それに関連して、元・呉師道の『呉礼部詞話』では、彼が見た『醉翁琴趣外篇』について以下のような記述がある。

前題東坡居士序、近八九語、所云散落尊酒間、盛為人所愛尚、猶小技、其上有取焉者。詞氣卑陋、不類坡作。

(前に東坡居士序と題するもの、ほぼ八、九語がある。云っていることは、(詞は)尊酒の間に散落し、盛んに人に愛好される。まるで小技のようだが、巧みな作はこれを取り上げる者がいるのだと。言葉の勢いは卑陋で、蘇東坡の作には似ていない。)

呉師道が見た『醉翁琴趣外篇』には、蘇軾のニセの序(この序は今日の『宋金元明本詞四十種』所収本にはない)があると述べている。おそらく、全く蘇軾の趣を感じさせない、一目見てニセモノとわかるもので、書肆が利益目当てに勝手に作成した文章だったと思われる。こうした書肆のいい加減さは琴趣外篇シリーズに共通していたようで、たとえば晁補之『晁氏琴趣外篇』について、明・毛晋はその跋で次のように述べる。

昔年見呉門抄本混入趙文宝諸詞、亦名琴趣外篇、蓋書賈射利、眩人耳目、最為可恨、余既釐正、介庵詞弁之詳矣。

(昔、呉門抄本を見てみると趙文宝の諸詞が混入しており、亦た琴趣外篇と名付けられたものは、おそらく書肆が利益のために、人の耳目を眩ましており、最も恨むべきものである。私はすでにこれを正しており、介庵詞のなかでこのことを詳しく解き明かした。)

晁補之の『晁氏琴趣外篇』には、趙文宝の詞が混入しており、毛晋はこうした琴趣外篇シリーズの編纂の杜撰さを嘆き、それは書肆が利益目当てで行ったとし、それを正したのであった。更に、『山谷琴趣外篇』について、饒宗頤『詞籍考』の中で以下の通り記載する。¹⁴⁾

至南宋閩刻山谷琴趣外篇三卷、詞數僅得一卷之半、譌文奪字、芟節題序、祝穆譏為俗本者也。

(南宋の閩刻である山谷琴趣外篇三卷は、詞数が僅に一卷の半分だけで、譌った文字や脱字があり、題序が削除されており、祝穆は俗本であると譏った。)

黄庭堅『山谷琴趣外篇』においても、文字の誤りや脱落、題序の削除等、大きな問題があったようである。このように琴趣外篇シリーズは、編纂における杜撰さが殊の外目立っていた。こうした傾向から考えて、『醉翁琴趣外篇』においても、おそらく書肆が杜撰な編纂をした可能性があり、当時欧陽脩詞として伝わっていた作品を本物かどうか検討せずに『醉翁琴趣外篇』に収録してしまった可能性が大いに考えられる。これは、『醉翁琴趣外篇』に欧陽脩詞ではない作品が含まれることとなった原因の一つであろう。

更に、詞の流伝過程に見られる混同についても考えたい。

詞の流伝において、妓女の果たした役割は大きいと言われる。そのことについて、たとえば武丹『中国妓女生活史』¹⁵⁾では、「由此可见、妓女对于文学的发展也做出了一定的贡献、至少可以说、她们对于唐诗、宋词和元曲的广泛传播都曾起过重要作用」と指摘し、妓女の影響を重視する。北宋、趙令時『侯鯖録』巻一では「欧公間居汝陰時、一妓甚韻。文公歌詞尽記之」とあり、欧陽脩詞をことごとく暗誦する妓女のこと記述されている。更に、『青泥蓮花記』巻十二では、妓女が宰相の誕生日を祝うために欧陽脩の「朝中措」の幾つかの文字を改変して替え歌を作成したところ、宰相が大いに喜んだという記述がある。¹⁶⁾ 替え歌であったが、元が欧陽脩詞なので、この

ような替え歌自体も欧陽脩詞として流伝していった可能性は高い。

かくの如く詞の流伝過程においては、伝承上の誤りや意図的な改変等が多々あったことと思われる。『醉翁琴趣外篇』には当時福建地方で、それら欧陽脩詞と考えられ流伝していたもの（本物かどうかは別）が収録されてしまったと考えられよう。しかも、欧陽脩には特にネームバリューがあった。彼の息子欧陽発の「事迹」には、

先公筆札、精勁雄偉、自為一家、当世士大夫有数十字、皆藏以為宝。

（先公の筆蹟は、すぐれて強く雄大で、自から一家をなしており、当代の士大夫は数十字有れば、皆所藏して宝とした。）と記述し、欧陽脩の自筆の作は有名で、そのため士大夫達が競って收藏するという当時の風潮が見て取れる。もちろんこの記述は、北宋時代の情況であり、『醉翁琴趣外篇』が刊行された頃の状況を述べているものではない。しかし、資料的正しさは求めず、売ればよいという南宋中葉頃における閩地方の書肆の出版態度に基づけば、欧陽脩作成かどうか疑わしい作品でも、彼が有名人であるが故に所謂売れ筋の作品として考え、詳しい考証もせずに『醉翁琴趣外篇』に欧陽脩詞として収録してしまったのではないだろうか。つまり、『醉翁琴趣外篇』は、欧陽脩の詞集であることは間違いないが、本物の欧陽脩詞以外に、伝承過程での誤りや改変された作も混入して編纂された書物だと言えよう。

六、おわりに

最後に『近体楽府』には収録されず『醉翁琴趣外篇』のみに収録されている七九首の欧陽脩詞について、どのように取り扱えばよいのかということについて考えたい。

これまで考察してきたように、当時の書肆の編纂態度や琴趣外篇シリーズの編纂の杜撰さから考えて『醉翁琴趣外篇』に収録されている詞の中で、他の詞人の詞集にも収録されている、所謂互見の作の場合、それは欧陽脩詞ではない可能性が高いと思われる。それに該当するのは以下の一〇首である。¹⁶⁾

于飛樂（卷二）↓張先

賀明朝（卷二）↓欧陽炯

一斛珠 其一（卷二）↓李煜

燕歸梁 其一（卷三）↓杜安世

恨春遲（卷四）↓張先

南鄉子 其三（卷五）↓馮延巳

浣溪沙 其二（卷六）↓張先

浣溪沙 其七（卷六）↓欧陽炯

江神子（卷六）↓張泌

夜行船（卷六）↓謝絳

一方、他の詞人の詞集にはなく『醉翁琴趣外篇』のみに収録されている場合は、様々な要素を勘案して判断するしかない。その一つとして、使用された詞牌に着目するという観点が挙げられると思う。村上哲見氏は、欧陽脩が用いた曲について次のように述べる。¹⁷⁾

つまり晏殊と欧陽修は、極めて限られた範囲の、それもほとんど唐五代以来の伝統的な曲にしか作詞しなかったということになるであろう。……詞は古近体の詩とは違って歌辞なのであるから、曲調に応じて作られ

ることはいうまでもなく、そこには音楽の素養とからみあった特殊な技術が必要であつたろう。従つて右に挙げたような事實は、少なくともそうした技術の面では、晏殊と欧陽修は張先・柳永にはるかに及ばなかつたことを示しており、それは恐らくアマチュアと専門家のような違いであるといえよう。

欧陽脩は曲に対する知識が乏しかったという指摘は注目すべきである。『近体楽府』にはなく『醉翁琴趣外篇』のみにある欧陽脩詞七九首において、使用されている詞牌は四七種類である。これらの四七種類の詞牌のうち、『欽定詞譜』等にも採録されず、歴来の数多くの詞人にも全く使用されず、唯一『醉翁琴趣外篇』のみに収録されたもの―錦香囊（卷三）、踏莎行慢（卷五）、解仙佩（卷六）―は、特殊な詞牌ということが考えられ、曲に詳しくない欧陽脩がこれらを作ることができたか否か。この三首は欧陽脩の作ではない可能性が考えられる。次に、欧陽脩在世当時存在していないか、全く流行していないかと思へられる詞牌―品令（卷三）、怨春郎（卷三）、塩角児其一、其二（卷四）―これらも欧陽脩詞ではない可能性がある。更に、彼が在世時に作られた曲、たとえば色街に出入りしていた柳永が作成した詞牌等、所謂同時代の流行曲―醉蓬萊（卷二）、看花回（卷二）、滿路花（卷四）―について、欧陽脩が唐五代以来の伝統的な曲にしか作詞しなかつたとするならば、これらの詞牌を使用していない可能性もある。また、欧陽脩の頃にはあつたが、その後詞牌名が変わり、『醉翁琴趣外篇』には変更された後の詞牌名で収録されている詞―惜芳時（卷二）、惠香囊（卷五）―の二首、及び『欽定詞譜』卷六に珠簾卷として収録され、そこには「此調僅見此詞。無他作可校」と記載されている聖無憂（卷六）、これらは伝承する過程で何らかの改変や変更、混乱があつた可能性があると思われる。

以上から、『醉翁琴趣外篇』のみに収録されている七九首の詞のうち、所謂互見の作一〇首、及び用いられた詞牌から疑問の生じた一三首の、合計二三首の詞は欧陽脩の作か否か、些か疑問符がつくことになる。これは逆

に言えば、残りの五六首は欧陽脩詞である可能性が高いことを意味している。もちろん、他の要素を勘案してこの五六首を更に検討する必要があるが、それは今後の課題としたい。ただ、これまでの考察から、『醉翁琴趣外篇』が南宋当時閩地方であくまでも欧陽脩の詞集として編纂されていたのは間違いない。しかも、俗艶という内容の故に、先行の『近体楽府』から削除されてしまい今日に伝わる可能性のなかった詞を含めて、当時欧陽脩詞として流伝していた作品（本物かどうかは別として）を『醉翁琴趣外篇』は広く収録していることになる。これは視点を換えれば、『醉翁琴趣外篇』の存在によって、今日に伝わった欧陽脩詞も数多いことを意味している。この点から言えば、『醉翁琴趣外篇』は欧陽脩詞を考える上で、価値のある詞集だと積極的に評価することもできると言えよう。『醉翁琴趣外篇』を欧陽脩の詞集ではない、あるいは偽作だとみなすことは決してできないのである。

注

- ① 柏寒『六一詞』（浙江古籍出版社、一九九〇年）八頁の記述。
- ② 宋柏年『欧陽脩研究』（巴蜀出版社、一九九五年）一四四頁の記述。なお、この部分の該書の記述は、注①柏寒『六一詞』の記述と表記が一カ所相違する（柏寒では「曾慥説、当時小人或作艶曲」で、宋柏年では「曾慥説是、当時小人或作艶曲」と「是」が加えられている）以外、全く同一である。
- ③ 李栖『欧陽脩詞研究及其校注』（文史哲出版社、一九八二年）第五章「醉翁琴趣外篇真偽考」。
- ④ 田中謙二「欧陽脩の詞について」（東方学七、一九五三年）。

⑤ 倉石武四郎「琴趣外篇に就て」（支那学第4巻第1号、一九二六年）。

⑥ 倉石氏は七種類と述べるが、既に見てきたとおり琴趣（外篇）と名のつくものは九種類存在していたことを確認できる。なお、長田夏樹「晁端礼と蘇門と琴趣外篇の詞人達」（神戸外大論叢第二一巻第三号、一九七〇年）において、「以上によって「琴趣外篇」には既述の醉翁・閑齋・山谷・淮海・晁氏・石林とこの小山を合せて7種が存在していたことが明らかである。なおこの他に『彊村叢書』中に張彦端（1121～1175）に『介庵琴趣外篇』があるが、これは性格が異なるので除くべきであろう」という記述がある。

⑦ 徐培均『淮海居士長短句』（上海古籍出版社、一九八五年）所収。

⑧ 淳祐一〇年（一二五〇）以降に完成したについては、陳棨素「直齋書錄解題作者陳振孫」（原載一九四六年一月二〇日大公報文史周刊、のち『直齋書錄解題』上海古籍出版社、一九八七年、附録二に収録）の考察に基づいた。

⑨ 注⑦参照。

⑩ 謝桃坊「歐陽修詞集考」（『文献』一九八六年二期）。

⑪ 注③参照。

⑫ 清水茂『中国目録学』（筑摩書房、一九九一年）四七～四八頁の記述。

⑬ 饒宗頤『詞籍考』（香港大学出版社、一九六三年）五〇頁の記述。

⑭ 武丹『中国妓女生活史』（湖南文艺出版社、一九九〇年）一四二頁の記述。

⑮ 『青泥蓮花記』巻十二の原文は次の通り。

「都下妓 此本欧公送貢父詞

有時相、本寒生、及登台位、嘗以措大自負。生日、都下有一妓、易朝中措數字為壽、曰屏山欄檻倚晴空、山色有無中。手種庭前桃李（元作亭前楊柳）、別來幾度春風。文章宰相（元作太守）、揮毫万字、一飲千鐘、行樂不須（元作直須）年少、目前看取仙

翁（元作翁）。時相憐其善改易、又愛朝中措之名、厚賞之。」

- ⑩ 注③李栖『歐陽脩詞研究及其校注』では、『醉翁琴趣外篇』に収録されている詞の真偽を「下篇第二部」において考察する。しかし、本稿ではその考察結果をそのまま踏襲することはできなかった。その大きな理由としては、李栖氏が真偽を考察する一つの方法として、『醉翁琴趣外篇』に収録されている詞の内容から判断して歐陽脩詞かどうかを決定していることが挙げられる。詞の内容から判断することについては既に本稿で述べたように意味をもたないからである。従って、本稿では別の基準を設定した。なお、本稿において詞牌の後の（ ）内の巻数は現在見ることができる『宋金元明本詞四十種』に収録される『醉翁琴趣外篇』の巻数を示す。

- ⑪ 村上哲見『宋詞研究』（創文社、一九七六年）一九七頁の記述。